UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part I

Japanese Studies

Wednesday 3 June 2009 13.30 – 16.30

J.5 CLASSICAL JAPANESE

*Answer **both** sections and **all** questions*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS
20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator.

SECTION A

1 Translate the following **unseen** passage into English, adding notes where you think they are needed. The Japanese headnotes are merely for your reference. Note the vocabulary items at the end [35 marks].

一 荘園の所有者である京都の公卿。平安時代、各地の荘園領主は中央の貴族に名目的に荘園を寄進し、自らはその役人として荘園の管理をするという事が多かった。平家が滅びて中央貴族の旧権が復活したという事で秩序の安定の得られた事を示そうとしたもの。なお、実際は当時守護・地頭が貴族の権益を侵しており、ここに書かれているのとは違っていた。二『百錬抄』に「午時地大イニ震フ。其声雷ノ如シ。震動之間、已ニ時刻ヲ送ル。…宮城ノ瓦・垣并ビニ京中ノ民屋、或ハ破損、或ハ転倒、一所トシテ全カラズ。…法勝寺阿弥陀堂顚倒ス。九重塔破損ス」。『山槐記』にも被害を記し、得長寿院の転倒を記す。その他諸記録にこの大地震が見え、特に『方丈記』の記述と『平家物語』とは、類似が多い（延慶本が最も『方丈記』と近し）。三 中国で畿内をいう語。ここでは皇域に近い地、京都をいう。次の「白河」と色の対比という効果も考えている。四 京都市左京区岡崎にあった法勝寺・尊勝寺・円勝寺・最勝寺・成勝寺・延勝寺の六寺。五 法勝寺にあった九重の塔。『玉葉』には「法勝寺九重塔、心柱ハ倒レズト雖モ、瓦已下皆震刻、成ス無キガ如シ」とある。六 元和版「振落ツ」、正節本「ゆり落し」。自然とくずれたのでなく、ある力が働き崩壊したことを示す。以下、この種のいい方が続く。七 京都

大地震

平家みなほろびはてて、西国もしづまりぬ。国は国司にしたがひ、庄は領家のままなり。上下安堵しておぼえし程に、同七月九日の午刻ばかりに、大地おびたたしくうごいて良久し。赤県のうち、白河のほとり、六勝寺皆やぶれくづる。九重の塔もうへ六重ふりおとす。得長寿院も三十三間の御堂を、十七間までふり倒す。皇居をはじめて、人々の家々、すべて在々所々の神社仏閣、あやしの民屋、さながらやぶれくづる。くづるる音はいかづちのごとく、あがる塵は煙のごとし。天暗うして日の光も見えず。老少共に魂を消し、朝衆悉く心をつくす。又遠国近国もかくのごとし。大地さけて水わきいで、磐石われて谷へまろぶ。山くづれて河をうづみ、海ただよひて浜をひたす。汀こぐ船はなみにゆられ、陸ゆく駒は足のたてどをうしなへり。洪水みなぎり来らば、岳にのぼってもなどかたすからざらむ。

市左京区聖護院あたりにあった寺。千体観音堂で、今の三十三間堂はこれにならって後に建てたもの。へ 底本「ふりたうす」。元和版「淘ヒ倒ナス」。ゝ 底本ふりがななし。正節本は「衆」に清音の記号を付し、元和版「衆」に濁点を付す。朝廷に仕える者と一般民衆と。屋代本・熱田本・延慶本「鳥獣」とある。あるいは「島獣」がよいか。一〇「山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巌割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ち処を惑はす」（方丈記）。一一 底本「盤石」。「盤」は当時「磐」と混用した。元和版などによる。一二 海水が揺れ動いて。地震による津波をいう。屋代本「海傾フシテ」。一三 高良本ミギハ、元和版・正節本「渚ヲ」、屋代本「奥ヲ」。一四「岳にのぼッても」「河をへだてても」の「も」は、大地震の際にはそうならない事をいうための語。

一 元和版・屋代本など「暫ハ」。二「さりぬべし」の音便。「さり」は避ける意。三 人間の力の及ばない絶望感を表わす語。大地震は底本「大地振」。以下同じ。四 よみは熱田本などによる。元和版リウ。五 底本「四大衆」。元和版・正節本・屋代本などによる。仏教で宇宙いっさいの物体を構成する元素とされる、地・水・火・風。「中」を元和版・正節本・熱田本ナカ、屋

猛火もえ来らば、河をへだててもしばしもさんぬべし。ただかなしかりけるは大地震なり。鳥にあらざれば空をもかけりがたく、龍にあらざれば雲にも又のぼりがたし。白河、六波羅、京中にうちうづまれて死ぬる者、いくらといふ数を知らず。四大種の中に、水火風は常に害をなせども、大地においてはことなる変をなさず。こはいかにしつることぞやとて、上下遣戸、障子をたて、天のなり地のうごくたびごとには、唯今ぞ死ぬるとて、声々に念仏申し、をめきさけぶ事おびたたし。七八十、九十の者も、世の滅するなンどいふ事は、さすが今日あすとは思はずとて、大きに驚きさわぎければ、をさなき者共も是を聞いて、泣きかなしむ事限なし。法皇はその折しも、新熊野へ御幸なッて、人多くうちころされ、触穢出できにければ、いそぎ六

question continues ….

(TURN OVER

代本ウチとよむ。六 底本「遣」の字にゲンとふりがな。引戸。七 屋代本・熱田本「八九十」。八 元和版は、この前に「常ノ習ヒナレ共」の一句がはいる。九『玉葉』に「法皇今熊野ニ御参籠、此事ヲ恐ルルニ依リ、忽ニ出御セラル」とある。新(今)熊野は、永暦元(一一六〇)年、後白河法皇が熊野権現を勧請され、京都市東山区内に建てた社。一〇 死者が出たため、その穢れに触れること。穢れに触れると、神事は行なえなかった。一一 元和版・熱田本・延慶本「六条殿」とある。「六条殿」は後白河法皇の宿所であった所。一二『玉葉』に「主上御池中島ニ渡御ス云々。其ノ後又南庭ニ幄ヲ打チ、御在所ト為ス」とあり、『山槐記』『百錬抄』にも同様な記事がある。一三『玉葉』に「院御所破損殊ニ甚シク、大幄寝殿傾キテ危ク、御所為ラザル之間、北ノ対ニ御坐ス」とある。なお、延慶本には「今夜ハ南庭ニ幄ヲ立テ主上渡セ給フ」とあり、そのほうが『玉葉』などの記述に合う。元和版ではこの文が「主上は…」の前にあり、それなりに整った文脈になる。一四 屋根に幕を張っただけの仮の家屋。一五 底本「ふりたをしけれは」。熱田本「振倒シテケレハ」。一六 陰陽寮に属し、天文の諸現象の観測にあたった官。異変のあった時はそれを検討し上奏する。この時は安倍広基。一七 今夜。亥は午後十時頃、子は午前零時頃。一八 転覆するだろう。「うち」は強めの接頭語。

波羅殿へ還御なる。道すがら君も臣も、いかばかり御心をくだかせ給ひけん。主上は鳳輦に召して、池の汀へ行幸なる。法皇は南庭に幄屋をたててぞましましける。女院、宮々は御所ども皆ふり倒しければ、或は御輿に召し、或は御車に召して出でさせ給ふ。天文博士ども馳せ参ッて、「よさりの亥子の刻には、かならず大地うち返すべし」と申せば、おそろしなンどもおろかなり。

法皇 Retired Emperor Go-Shirakawa
主上 The (new) Emperor
女院宮々 The Emperor's mother and the Imperial Princes

'Daijishin' from *Heike monogatari* (1965), Chapter 20 (NKBZ, vol. 30), pp. 449–52.

SECTION B

Candidates should answer all the following questions relating to **seen** texts:

2 Write a commentary on each of these poems [25 marks].

ふる年に春たちける日よめる　在原元方

1 年の内に春は来にけりひととせを去年とやいはむことしとやいはむ

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに　小野小町

113

東の方へ、友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。三河国八橋といふ所にいたれりけるに、その河のほとりに、かきつばたいとおもしろく咲けりけるを見て、木のかげにおりゐて、かきつばたといふ五文字を句のかしらにすゑて、旅の心をよまむとてよめる　在原業平朝臣

410 からころもきつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

橘のにほふあたりのうたゝねは夢も昔の袖のかぞする　皇太后宮大夫俊成女

245

摂政太政大臣家歌合に、羇中晩嵐といふことをよめる　定家朝臣

952 いづくにか今夜は宿をかり衣　日も夕暮の嶺の嵐に（有・隆・雅）

Kokinshū, poems 1, 113, 410; *Shinkokinshū*, poems 245, 952.

(TURN OVER

3 Write explanatory notes on the following passage paying particular attention to religious matters [10 marks].

ソノ所ノサマヲ言ハバ、南ニ懸樋アリ。岩ヲ立テテ、水ヲタメタリ。林ノ木チカケレバ、爪木ヲ拾ウニ乏シカラズ。名ヲ音羽山トイフ。マサキノカヅラ、跡埋メリ。谷シゲヽレド、西晴レタリ。観念ノタヨリ、ナキニシモアラズ。春ハ、藤浪ヲ見ル。紫雲ノゴトクシテ西方ニ匂フ。夏ハ、郭公ヲ聞ク。語ラフゴトニ死出ノ山路ヲチギル。秋ハ、蜩ノ声耳ニ満リ。空蟬ノ世ヲカナシム楽ト聞コユ。冬ハ、雪ヲアハレブ。積モリ消ユルサマ罪障ニタトヘツベシ。若念仏物ウク読経マメナラヌ時ハ、ミヅカラ休ミ、身ヅカラ怠ル。サマタグル人モナク、又、恥ヅベキ人モナシ。コトサラニ無言ヲセザレドモ、独リ居レバ、口業ヲ修メツベシ。必ズ禁戒ヲマモルトシモナクトモ、境界ナケレバ、何ニツケテカ破ラン。

KAMO NO CHŌMEI, *Hōjōki* (SNKBT), vol. 30, pp. 20–21.

4 Translate the following passage into English adding explanatory notes where you think they are needed [15 marks]

若跡ノ白波ニコノ身ヲ寄スル朝ニハ、岡屋ニ行キカフ船ヲナガメテ満沙弥ガ風情ヲヌスミ、モシ桂ノ風葉ヲ鳴ラス夕ニハ、尋陽ノ江ヲ想ヒヤリテ源都督ノ行ヒヲナラフ。若余興アレバ、シバ〳〵、松ノヒヾキニ秋風楽ヲタグヘ、水ノ音ニ流泉ノ曲ヲアヤツル。芸ハコレ拙ケレドモ、人ノ耳ヲ悦バシメムトニハアラズ。ヒトリ調ベヒトリ詠ジテ、ミヅカラ情ヲ養フバカリナリ。

三五 「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎゆく船の跡の白波」の歌に託して、世の無常をしみじみ思う朝には。歌は満沙弥の作。万葉集所載歌は下の句「漕ぎ去にし船の跡なき如し」(三・三五)。平安以後「跡の白波」という形に変わる。三六 一付図3

三七 満誓(まんせい)沙弥の略称。俗名、笠朝臣麻呂(かさのあそんまろ)。養老五年(七二一)出家して満誓と称した。

三八 白楽天「琵琶行」の冒頭「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋索々」の「楓」と、源都督の住んだ「桂」とを重ね合わせた。「楓 カツラ(桂)」(平他字類抄)。

三九 白楽天の左遷された江州の揚子江沿岸の一地名。「或抄云、琵琶ハ胡国ヨリ出デテ、漢家ニ盛ナリ。…謝鎮西ハ沙漠ニ引キ、白楽天ハ尋陽ニ聞ク」(教訓抄八)。

三〇 源経信(みなもとのつねのぶ)。大宰府の権帥(ごんのそつ)だったので、「源都督」と唐名で呼ぶ。また、洛外、桂の里の別荘に因んで、桂大納言の名がある。永長二年(一〇九七)没。彼の琵琶の流派を桂流と称する。

三一 「若シ余興有ルトキンバ、児童ト少船ニ乗テ舷ヲ叩キ楫ヲ鼓ス」(池亭記)。

三二 「松風入夜琴といふ題を…。琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをより調べそめけん」(拾遺集・雑上)。

三三 箏の琴の曲名。「秋風楽ハ西土来迎ノ楽ナリ」(続教訓鈔十一)。「姫君は、そばなる琴を引き寄せて、秋風楽といふ楽を調べ給へば、まことに天人も天下り、菩提も此処に来光かと」(箱根本地由来)。

三四 琵琶の秘曲「石上流泉」。「抑、流泉曲とは、都率内院の秘曲なり。菩提楽とはこの楽なり」(源平盛衰記三十一)。長明は琵琶の名手であった。三五 「予、門ヲ杜ギ戸ヲ閉ヂテ、独リ吟ジ独リ詠ズ」(池亭記)。

KAMO NO CHŌMEI, *Hōjōki* (SNKBT), vol. 30, p. 21.

(TURN OVER

5 Translate the following passage into English adding explanatory notes where you think they are needed [15 marks]

〔三〕

弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつましきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく。

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として行道なをすゝまず。

人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。

'Oku no hosomichi', *Matsuo Bashō shū* (NKBZ, vol. 41), p. 342.

END OF PAPER